

江戸町と御使番町における武家屋敷地の変遷

— 福井城下の武家地の研究 その19 —

伊豆蔵 庫喜*

The Change of the Samurai's Premises in *Edo-machi* and *Otsukaiban-cyo*

— A Study on the Samurai's Premise of the Fukui Castle Town, Part19 —

Kouki IZUKURA

This paper considers the change of the samurai's premises in *Edo-machi* and *Otsukaiban-cyo*, referring to the 'FUKUI JOUKA-EZU'. *Kami-Edo-machi* and *Naka-Edo-machi* was performed allotment of the premises with the marriage of 'KATSUHIME' in Keicho 16 years. There were many premises substitutes of *Kami-Edo-machi* immediately after 'KATSUHIME' migrated to Edo for Genna 9 years. The allotment of the premises site of *Otsukaiban-cyo* had a big changed after the salary reduction of Jokyo 3 years. In *Otsukaiban-cyo* of the Keicho era period *Otsukaibans* a lot of lived, however the mansions of the *Otsukaiban* disappeared all after Jokyo 2.

Keywords : 江戸町、御使番町、屋敷割、屋敷替え、武家屋敷地、地方地

1. はじめに

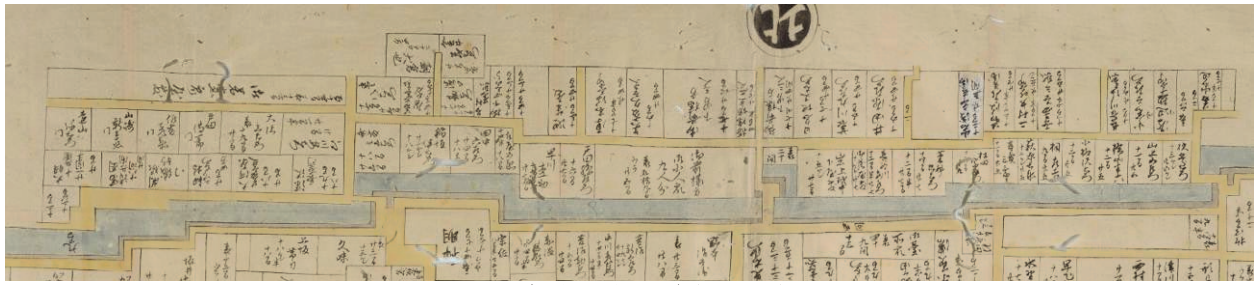
既報¹⁾では、『松平文庫』所蔵の江戸時代を通して武家屋敷地の屋敷割や居住者がわかる8図の城下絵図²⁾を用いて、江戸初期から幕末までの武家屋敷地の屋敷割の変化や屋敷替えについて報告した。本稿は同じ城下絵図を用いて、本丸の北方、武家屋敷地の最北端に位置する江戸町と御使番町における武家屋敷地の変遷について考察する。

江戸町は、慶長16年(1611)に2代将軍徳川秀忠の三女勝姫が福井藩2代藩主忠直の正室として北ノ庄城(後、福井城)に興入れした際、江戸より随従した家臣(江戸衆)に居住区として屋敷割され成立した武家町である³⁾。一方、御使番町は江戸町の西隣にあり、他藩への使者として勤仕した御使番の居住区であった⁴⁾。

2. 城下絵図にみる江戸町と御使番町

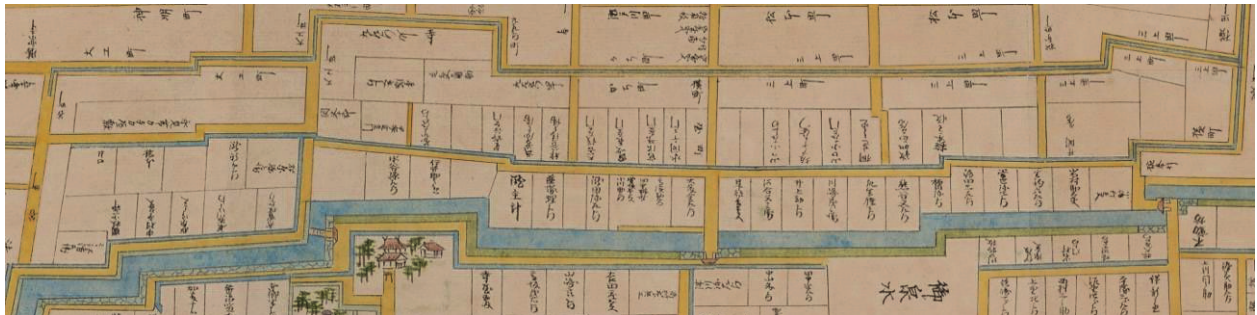
8図にみられる江戸町と御使番町の武家屋敷地の様子を示すものが図1で、これらの絵図に記されている各屋敷地の居住者や藩役所を年代別にまとめたものが表1である。図2は8図中最も古い『北之庄城郭図』(図1-1)の屋敷割を書き起こしたもので、図2に記した屋敷地の番号は筆者が便宜上付けたものであり、表1の屋敷地番号はこれに対応している。

* 建築学科



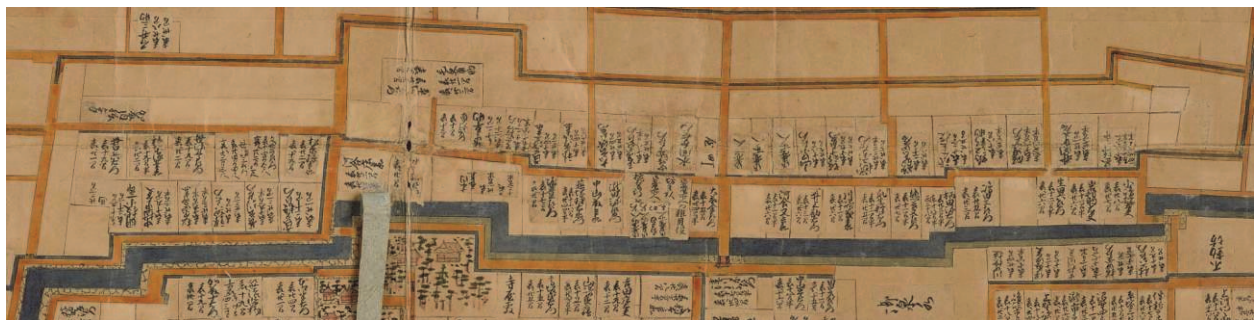
1. 慶長18年以前(～1613)

(1309. 『北之庄城郭図』)



2. 万治2年大火前(1659)

(1315. 『御城下之図』明治期複製)



3. 寛文9年大火前(1669)

(1319. 『御城下之図』)



4. 貞享2年(1685)

(1320. 『福居御城下之図』)
(城下之図はすべて『松平文庫』より)

図1 城下之図にみる江戸町と御使番町の武家屋敷地(1)



5. 正徳4年(1714)

(1325.『御城下之絵図』)



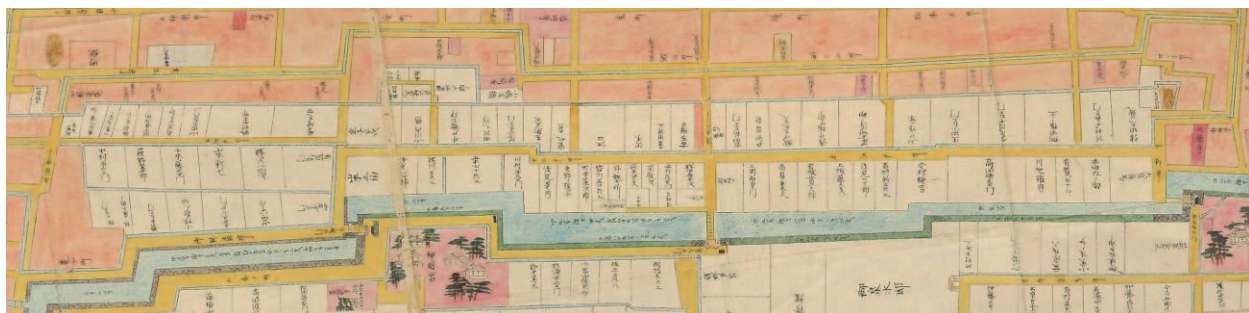
6. 安永4年(1775)

(1336.『御城下絵図』)



7. 文化8年(1811)

(1340.『福井分間之図』)



8. 慶応年間(1865~67)

(1342.『御城下之図』明治14年復原)

(城下絵図はすべて『松平文庫』より)

* : 各絵図の下段、左隅の番号(4ケは、所蔵機関『松平文庫』の記号である。)

図1 城下絵図にみる江戸町と御使番町の武家屋敷地(2)

表1 各時代における武家屋敷地の居住者と藩役所（江戸町・御使番町）

町名	屋敷地番号	年代									
		慶長18年 (1613)	坪数 (坪)	万治2年(大火前) (1659)	寛文年間(大火前) (1661～72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865～67)	
上江戸町	KE-1	秋五郎右衛門	325		小嶋権太夫	小嶋権太夫	奥田与市	野村一郎左衛門	大宮藤一郎	大宮	大宮藤馬
	KE-2	山上五左衛門	275								
	KE-3	権山平六	300	岩村助太夫	岩村助太夫	平岡十左衛門	松江平太夫	本多彦三	本多	本田政ノ助	
	KE-4	小柳深右衛門	300	生駒(田)六左衛門	生田六左衛門	今立六右衛門	堀江十太夫	有賀左衛門	有賀	有賀亦十郎	
	KE-5	桐左吉	225	常世弥次左衛門		長谷川三衛門	陶山六郎兵衛	川地平八右衛門	川地	川地権内	
	KE-6	萩原長兵衛	300								
	KE-7	有賀三三郎	275	嶋田三左衛門	嶋田三左衛門	嶋田彦五郎	高田重太夫	高田三郎左衛門	高田	高田孫左衛門	
	KE-8	松田宗左衛門		柄田源右衛門	柄田源右衛門	井上養甫	石川彦左衛門	岩上五郎八	今村	今村鎌吉	
	KE-9	薬科甚右衛門	378	熊谷又左衛門	熊谷又左衛門	武曾九太夫	武曾権左衛門	高村甚右衛門	高村	高村新五兵衛	
	KE-10		338	瓜生権右衛門	瓜生権左衛門	高畑三郎左衛門	毛利与七	細井祐的	細井(兄)	浅見七十郎	
	KE-11	長谷川安左衛門	338	川崎茂兵衛	川崎茂兵衛	川崎茂兵衛	河崎定右衛門	大崎四郎之助	上坂	上坂藤太夫	
	KE-12	御蔵屋敷	270	井上勘右衛門	井上勘左衛門	岡部小治郎	瀧美新右衛門	野本市太郎	岩城	岩城貫之輔	
	KE-13	岩上越中 下屋敷	405	河合又兵衛	河合又兵衛	河合猪右衛門	廣田加左衛門	高畑金太夫	高島	高島金太夫	
	KE-14			日下部善太夫		周防猪左衛門	河村四左衛門		三岡	三岡助右衛門	
					御台所人	萩原権太夫	萩原作太夫		御茶島	村山嘉太郎	
	KE-15	御前様方 下男三人	408		御台所人	飯嶋伝左衛門	吉田豊太郎	高島又五郎	吉田	吉田新左衛門	
	KE-16	日名地又右衛門	408	山口小左衛門	御台所人	安原利右衛門	安原理左衛門		戸田	戸田周助	
	KE-17	荒川九左衛門	360	坂部十左衛門	山口小左衛門	山下八右衛門	河合瀧右衛門		織田	織田三太夫	
	KE-18	井田源左衛門	360	山口小左衛門	坂部十左衛門	坂部八左衛門	坂部三五右衛門		浅井	浅井権士郎	
	KE-19			桐甚兵衛	瀧新右衛門	塩持持所	上月武左衛門	国枝藤三郎	尾高	尾高治ノ助	
	KE-20	岩浅市兵衛	300	欲賀(鹿)正庵	欲賀(鹿)正庵		比企佐左衛門	山口七十郎	山口	山口作弥	
	KE-21	前波庄兵衛	324	鈴木主税	鈴木主税	高塚甚兵衛	小栗与右衛門	生田八郎右衛門	生田	生田小右衛門	
	KE-22	二村勝次郎	263								
	KE-23	寺西太兵衛	263		堀江新助	堀江刑部左衛門		長谷川次郎左衛門	荒川	荒川十右衛門	
	KE-24				飯田治郎右衛門	田中西兵衛	山田又四郎	塚田喜兵衛	柄田	柄田権ノ丞	
	KE-25	長谷川源兵衛	250								
	KE-26	小倉太左衛門	250	井関本庵	井関本庵	瀧勘兵衛	瀧勘兵衛	土屋十郎右衛門	河村	川村十郎右衛門	
	KE-27	渡辺勘十郎	250		岡弥十郎	岡八兵衛	岡三郎左衛門	加藤三右衛門	津田	津田左藏	
	KE-28										
	KE-29	藤山右近	179			松原五兵衛	鈴木忠左衛門		田辺	田辺五太夫	
KE-30											
中江戸町	NE-1	御前様方 御小人衆 九人分	1475	大藤金左衛門	大藤金左衛門	大藤金左衛門	勝山彦五郎	稲葉与一郎	野田	野田喜平次	
				高橋勘太夫・田中林三郎	御台所人・雑用役	高濱祐介	高濱勘左衛門		荒川	荒川	
				野坂・小川助左衛門	坊主頭・御台所人	田中喜左衛門	多喜田彦衛門	ノムラ 助	山本	山本敬次	
					御台所人・勾当・御台所人	稲葉与左衛門	野村茂兵衛		萩原	萩原伊太夫	
					梶奉行・御台所人	高山三兵衛	川地次右衛門		寺木	寺木	
						内藤四郎右衛門	古石喜左衛門	シミツ十太夫	島津	外塾所	
						田崎仁左衛門	田崎仁太夫		近藤	近藤十兵衛	
						吉村道宇	地子地	テラ木十兵衛	皆川	皆川善次郎	
				瀧田弥左衛門	瀧田弥左衛門	瀧田弥左衛門	皆川与一右衛門		太平	大平藤次郎	
				中山藤兵衛	中山藤兵衛	中山藤兵衛	大河内与左衛門	田口十門	矢野	矢野権平	
	NE-2	戸田孫左衛門	432	菰塚理右衛門	菰塚理右衛門	皆川与一右衛門	津田源右衛門	矢野権平	浅見	浅見甚内	
	NE-3	早川李助	432	瀧主計	堀豊左衛門	長野庄藏	寒江貞兵衛	武沢小作	■寺	川村半左衛門	
	NE-4	古屋五兵衛	261			鈴木源兵衛	木内甚兵衛	浅見七十郎	幸山	幸山十兵衛	
	NE-5	田中六左衛門	432	伊井助之進	本宮祐節	伊藤権兵衛	半井照真	杉浦兵左衛門	梶川	梶川半兵衛	
	NE-6	稲垣伊右衛門	378	水谷源左衛門	■■■	勝田新六	稲葉要人	大沢左七郎	浅見	浅見信輔	
	NE-7	若党之 屋敷	238	平塚宗右衛門	平塚宗右衛門	陶山彦右衛門	津田祐七	ホンタ彦太郎	中野	山川内膳	
									山川		
	NE-8	朝倉丈也	400			江川儀兵衛	粕伊勢 与力	ミアケ熊次郎	吉江	吉江徳右衛門	
							粕伊勢 与力	ユアサ兵五左衛門	湯浅	富田	
								シミツ伝右衛門	島瀬	嶋瀬	
	NE-9	金井茂右衛門	400	毛受角之丞	毛受角之助	鈴木甚五太夫	鈴木権兵衛	梁田七左衛門	磯松	磯松信太郎	
	NE-10	濱口勘右衛門	187	岡本左次右衛門		井戸团五郎	井戸久兵衛	土屋左衛門	井戸	井戸惣三郎	
	NE-11	名村寛兵衛			田中平助	笹治三右衛門	栗崎道の		田川	田川乙作	
	NE-12	柳下江五郎	299	星野伊右衛門	星野伊右衛門	高村源四郎	高村四郎左衛門	落合丈右衛門	落合	落合丈右衛門	
NE-13		322	武曾孫兵衛	武曾孫兵衛	落合甚介	小村又右衛門	沢木金右衛門	生駒	生駒彦太		
NE-14	池生殿	312	神谷清兵衛	神谷清兵衛	落合右五太夫	中村又兵衛	山名次郎右衛門	八木	管北直		
NE-15	厚木弥三郎	420	大谷儀左衛門	大谷儀左衛門	大谷儀右衛門	大谷儀右衛門	江口次郎兵衛	江口	江口		
NE-16	矢原久太夫	360	雪吹喜左衛門	雪吹喜左衛門	林六右衛門	力丸又右衛門	中村一郎右衛門	沢木	沢木		
NE-17	御前様方 下男三人	408	水間千右衛門	水間千右衛門	立岩平太夫	立岩儀太衛門	中村太郎左衛門	真田	真田源五		
NE-18	掃除坊主 二人	108	町人地	町人地	水間仙左衛門	陶山彦左衛門	鈴木又三郎	古石	古石弾右		

下江戸町	SE-1	齊藤与三右衛門	414		河合庄兵衛	河合与兵衛	榊原七郎左衛門		山本	山本正伯
	SE-2	森八右衛門	391	関又十郎		井上半太夫	萩原丞太夫	三岡三郎右衛門	金子	金子平次
	SE-3	江川安右衛門	430	松原源兵衛	松原源兵衛	岩村門左衛門	加賀喜太郎		有賀	有賀清門
	SE-4	大沢三右衛門	380	瀧次右衛門	久世与左衛門	戸田安兵衛	松波甚右衛門		勝沢	勝沢一順
	SE-5	戸田伝市	380		笹治三左衛門	剣持久右衛門	剣持久右衛門	勝沢一蔵	山本	山本新七
	SE-6	佐藤彦兵衛	380	橋本	笹治五郎左衛門	笹治源右衛門	落合嘉兵衛	白石老兵衛	千本	千本藤左衛門
	SE-7	山崎新兵衛	380	井口	橋本源兵衛	鯉淵与兵衛	佐野伊八	萩野利右衛門	萩野	萩野金四郎
	SE-8	遠山弥五左衛門	380		井口兵右衛門	井口兵右衛門	田井十兵衛	林久太夫	中村	中村市右衛門
	SE-9	御若党之屋敷	1482	永見帯刀 与力屋敷	加藤内膳 与力	永見大吉 与力 十三軒他	田辺宗眠	有賀六郎右衛門	慶増	慶増亮助
御使番町	Ot-1	深澤長右衛門	342	武曾権左衛門	武曾権左衛門	加藤武右衛門	河崎三郎助	萩原源之助	西尾	西尾十左衛門
	Ot-2	大河原藤太夫	360	長谷川八右衛門	長谷川八右衛門	長谷川八郎衛門	津田弥太夫	サカイ十郎	山邑	山邑八十郎
	Ot-3	剣持六郎右衛門	400	剣持六郎右衛門	剣持六郎右衛門	剣持七郎右衛門	吉田長助	アラ木太郎衛門	青木	青木七郎右衛門
	Ot-4	関根織部	400	松原四郎兵衛	松原四郎兵衛	松原四郎兵衛	松原十太夫	アサミ源一郎	小林	小林勘之助
	Ot-5	富岡清兵衛	360	中村市太夫	中村市太夫	大井田角右衛門	原平左衛門	ハラ平左衛門	原	原平左衛門
	Ot-6	大羽十兵衛	430	国枝小一郎	国枝小一郎	国枝小市郎	国枝小一郎	スハラ喜三郎	林	林藤五郎
	Ot-7		240	浪江清兵衛		浪江清兵衛		町人地	堀	堀十左衛門
									町人地	

※：慶長18年の坪数は、絵図にある間口・奥行の寸法から算出した。また、空欄は空き地、網かけは付紙の剥がれ、太字ゴシックは藩役所や藩施設を示す。

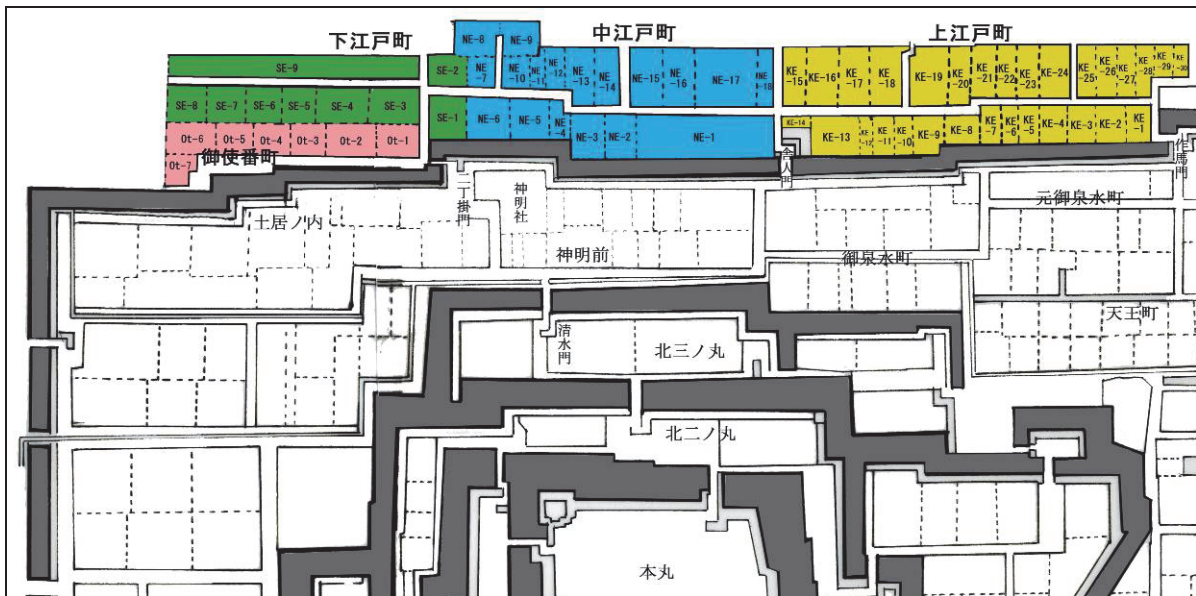


図2 慶長18年頃の江戸町と御使番町の屋敷割

2.1 慶長18年以前 (図1-1)

慶長18年(1613)頃の江戸町は、東から上・中・下江戸町が並び⁵⁾、南側は4重目の堀を隔てて神明前や御泉水町と接し、北側は三上町や鍛冶町などの町人地と隣接している。一方、御使番町は、下江戸町の南側の屋敷地の背後にあり、4重目の堀沿いの通りに面している。

敷地数は江戸町が57筆、御使番町が7筆あり、これらの坪数は200坪以下が3筆、200坪～400坪が52筆と多く、なかでも300坪代が24筆で集中している。1000坪を超えるのは、中江戸町のNE-1(御前様方 御小人衆九人分)と下江戸町のSE-9(御若党之屋敷)の2筆のみである。上江戸町は30筆の屋敷地があり、KE-12(御蔵屋敷)とKE-13(岩上越中下屋敷)以外は、勝姫とともに福井城下に移住した家臣の屋敷である。中江戸町は18筆あり、NE-7(若党之屋敷)やNE-18(掃除坊主)など藩施設が3筆みられるが、残りの12筆は上江戸町同様、勝姫に仕える家臣の屋敷である。

下江戸町は9筆と少なく、SE-9(若党之屋敷)を除く屋敷地はすべて武家屋敷である。但し、SE-2(棗八右衛門)以外の居住者は、いずれも藩の御使番を勤めている⁶⁾。

御使番町の屋敷地は7筆である。居住者をみても、深澤長右衛門(0t-1)や大河原藤太夫(0t-2)をはじめ7人中6人が御使番である。したがって、下江戸町と同じように御使番町もこの時期、御使番の役宅が多くあったことが明らかである。

2.2 万治2年大火以前 (図1-2)

万治2年(1659)の大火前の図1-2をみると、下江戸町と御使番町の屋敷割は慶長18年時とほぼ同じであるが、上江戸町と中江戸町は屋敷割に一部変化がみられる。上江戸町の屋敷数は27筆で、慶長期より3筆減っている。これは慶長18年以降、KE-1とKE-2が合筆して小島権太夫家になったほか、KE-25~28が井関本庵の屋敷になるなど4筆の合筆およびKE-15とKE-18の2筆が分筆したためである。中江戸町は、慶長18年~万治2年の大火前の間に合筆は1例もなく、慶長期は大きな敷地であったNE-1が細かく分筆されたことで21筆に増えている。

居住者は、御使番町の剣持六郎右衛門(0t-3)以外の51筆(江戸町45筆・御使番町6筆)が、慶長18年~万治2年の大火前の間にすべて入れ替わっている。特に上江戸町と中江戸町に配されていた勝姫に仕えた下男や小人衆の屋敷は、すべて大藤金左衛門や瀧田弥左衛門など7士に替わっている。さらに中江戸町の東端にあるNE-18が町人地になっている。また、慶長期には下江戸町と御使番町に多く住んでいた御使番も、万治2年の大火前は御使番町の剣持六郎右衛門だけになる。したがって、江戸町と御使番町はともに慶長18年~万治2年の大火前の間に、大規模な屋敷替えがあったと判断できる。

2.3 寛文9年大火以前 (図1-3)

万治2年の大火後の福井城下は、本丸の西北にあった寺院を城下北端に移転させ、その跡地が町人地になるなど大きく変化している⁷⁾。しかし、江戸町と御使番町の屋敷割は、上江戸町と下江戸町で分筆が1例ずつあるだけで、万治2年の大火前の状態とほとんど変わってない。つまり、先の万治2年の大火の際、江戸町と御使番町は罹災を免れた可能性が高い。

万治2年の大火後~寛文9年(1669)の大火前の間の屋敷替えは、江戸町で20件(上江戸町9件、中江戸町6件、下江戸町5件)みられる。そのほとんどが武家同士の屋敷替えであるが、万治2年までに分筆されて空き地になっていた上江戸町のKE-15に藩の台所人が新たに入り、中江戸町のNE-1の一部も台所人や椀奉行などに替わっている。このように、藩の台所方の役宅が集中して置かれた例は、これまでみてきた他の区域では確認できない。

一方、御使番町は0t-7の渋江清兵衛の屋敷が空き地に替わっただけで、残り6筆の居住者は万治2年時と同じである。

2.4 貞享2年 (図1-4)

福井城下は寛文9年の大火で城下の北側(橋北)の大部分が焼失し、焼け残ったのは東北部の天王町と松本8町のみであった⁸⁾。江戸町と御使番町も焼失したが、貞享2年の絵図をみると両町の屋敷割は寛文9年の状態とほぼ同じであり、罹災後に大火前の屋敷割で復興されたと思われる。

貞享2年(1685)までの屋敷替えは上江戸町で20件、中江戸町で23件、下江戸町で6件あり、江戸町全体で49件ある。やはり武家同士の屋敷替えが中心で、寛文9年の大火前までに台所方の役宅になっていた中江戸町のNE-1は、分筆されて高濱祐介や田中喜左衛門など7士に与えられている。また、慶長18年～万治2年の大火前の間に町人地になった中江戸町のNE-18が、再び武家屋敷に戻っている。

貞享2年の図1-4をみると、上江戸町のKE-15～16の一部は「御台所人」に替わって、飯島伝左衛門や安原利左衛門などの個人名が示されている。図1-4は職名から個人名に名称が変わった例が既にみた他の区域でも多く、江戸町も飯島伝左衛門や高濱祐介らは藩の台所方を勤めている。したがって、上江戸町と中江戸町はこの時期、台所方が多く住む区域とみてよい。また、上江戸町のKE-18に藩の塩硝持所が設けられたことも、江戸町の特徴である。

御使番町はこの期間の屋敷替えは2件で、いずれも武家同士の屋敷替えである。但し、7筆の居住者の中で御使番の職務にある者は一人もいない。

2.5 正徳4年(図1-5)

正徳4年(1714)の上江戸町と中江戸町の屋敷割は、貞享2年時とほぼ同じである。しかし、下江戸町は大きな敷地を有していた北側のSE-9が細かく分筆されて屋敷数は17筆に増えている。御使番町も屋敷割に変化がみられ、西端にあった武家屋敷(0t-7)が町人地になっている^{9・10)}。

貞享2年～正徳4年の間の屋敷替えは江戸町と御使番町とも多い。特に下江戸町は、町の北側を占めていた永見大吉家の与力屋敷(SE-9)がすべて武家や医師の屋敷に替わっている。さらに中江戸町のNE-1の一部が地子地¹¹⁾になり、御使番町の0t-7が町人地になるなど屋敷地の変動が激しい。このように、貞享3年(1686)の大法以降、多くの武家屋敷や与力屋敷が、漸次地子地(含、地方地¹²⁾)や町人地に替わっている。これは、貞享の大法による武家の削減に関連している。

2.6 安永4年(図1-6)

安永4年(1775)の中江戸町の屋敷地は30筆で、正徳4年時より1筆増えている。これは正徳4年までに分筆して2筆になったNE-8が、さらに分筆して4筆に増えた結果である。それ以外の上江戸町や下江戸町、御使番町の屋敷割は、正徳4年の状態とほぼ同じである。

図1-6は居住者を示す付紙が剥がれている例が多い。居住者が判るものでは、上江戸町の西端にあるKE-15が一部地方地になるなど19件の屋敷替えが確認できる。中江戸町も上江戸町同様、7筆の付紙が剥がれているが、NE-1の勝山彦五郎が稲葉与一郎になるなど23件で居住者が入れ替わっている。但し、貞享2年～正徳4年の間に地子地になったNE-1は再び武家屋敷に戻っている。下江戸町は6筆の居住者が特定できないが、SE-2が萩原丞太夫から三岡三郎右衛門に替わるなど屋敷替えは10件みられる。対して御使番町の6筆は、すべての居住者が判明でき、0t-5のハラ(原)平左衛門以外の5件で屋敷替えがみられる。

2.7 文化8年(図1-7)

図1-7で文化8年(1811)の屋敷割がわかる。江戸町と御使番町ともに安永4年～文化8年の間は分筆が1～3例あるだけで、屋敷割の状態は安永4年時とほぼ同じである。

上江戸町の屋敷替えは9件あり、安永4年までに地方地に替わったKE-15が再び武家屋敷に戻ったのをはじめ、KE-8が岩上五郎八から今村家になるなど武家同士の変化がほとんどである。ところで、西端のKE-15は武家屋敷の一部が「御茶畠」になっている。こうした例は、これまでみてきた他の区域ではみられなかった。中江戸町では島津(NE-1)と湯浅、島瀬(NE-8)ら3家を除く20筆の居住者が替わっている。下江戸町も同様に、萩野家以外の居住者はすべて入れ替わっている。

御使番町もやはり安永4年以降、居住者が替わった屋敷地が多い。例えば、Ot-1は萩原源之助から西尾家に替わるなど7人中5人が屋敷替えしている。

2.8 慶応年間(図1-8)

文化8年～慶応年間(1865～67)の間の屋敷割の変化は、上江戸町と中江戸町で合筆が1例ずつあり、敷地数はともに減少している。これに対して、下江戸町と御使番町はこの間に合筆と分筆は1例もなく、屋敷数は文化8年時と変わっていない。

上江戸町の屋敷替えは、慶応までに3件みられる。KE-10は細井(兄)家が浅見七十郎に替わったほか、KE-14が永田家から武田家になり、先の文化8年時に西端のKE-15にあった茶畠が無くなり、その跡地は新たに村山嘉太郎が入っている。中江戸町も慶応までに4件の屋敷替えがあり、NE-1の一部が藩の外塾所になっている。このように、区域内に外塾所が置かれた例は、前稿¹³⁾で報告した元御泉水町でも確認できる。

下江戸町と御使番町の屋敷替えは1件もなく、文化8年～慶応にかけては下江戸町の空き地(SE-8)を除いた屋敷地24筆はすべて武家屋敷になっている。

3. 武家屋敷地の変遷

これまで述べてきた慶長18年～慶応までの江戸町と御使番町における各時代の合筆と分筆、屋敷替えや空き地の件数を表2に示した。

3.1 屋敷割

表2のように、慶長18年頃の上江戸町の屋敷地は30筆ある。その後、万治2年の大火前までに4筆の合筆と3筆の分筆で27筆に減るが、万治2年の大火後～寛文9年の大火前の間の分筆で28筆に増えている。それ以降、慶応までに合筆と分筆を繰り返しながら、慶応年間には27筆になっている。

中江戸町は慶長18年以降、1475坪と広い敷地であったNE-1が細かく分筆されるなど屋敷割に変化がみられる。慶長期の屋敷地18筆は、万治2年の大火前までに21筆に増加し、さらに寛文9年の大火後～貞享2年の間の分筆で28筆に増えている。その後も分筆が多く、安永4年～文化8年にかけて33筆に増加している。しかし、文化8年以降の合筆によって32筆に減っている。

下江戸町の屋敷割をみると、慶長18年頃に9筆あったものが、寛文9年の大火前までに1筆分筆して10筆に増えている。その後は、貞享2年～正徳4年の間の分筆で大幅に増えて17筆になり、さらに文化8年にかけて18筆に増加し、この18筆は慶応まで同じである。

表2 各時代の屋敷割と屋敷替え、空き地の件数

単位：筆

町名	年代	慶長18年 (1613)	万治2年 (1659)	寛文年間 (1661~72)	貞享2年 (1685)	正徳4年 (1714)	安永4年 (1775)	文化8年 (1811)	慶応年間 (1865~67)
上江戸町	屋敷割	合筆	4	0	1	0	0	0	1
		分筆	3	1	0	0	0	1	0
	屋敷数	30	27	28	27	27	27	28	27
	屋敷替え	0	19	9	20	19	19	9	3
	変化なし		0	13	6	6	1	11	23
	空き地	6	8	6	1	1	7	8	1
中江戸町	屋敷割	合筆	0	0	0	0	1	0	1
		分筆	3	0	7	1	2	3	0
	屋敷数	18	21	21	28	29	30	33	32
	屋敷替え	0	17	6	23	22	23	20	4
	変化なし		0	12	4	7	0	6	28
	空き地	1	4	3	1	0	7	7	0
下江戸町	屋敷割	合筆	0	0	0	0	0	0	0
		分筆	0	1	0	7	0	1	0
	屋敷数	9	9	10	10	17	17	18	18
	屋敷替え	0	6	5	6	15	10	10	0
	変化なし		0	3	3	1	0	1	17
	空き地	0	3	2	1	1	7	7	1
御使番町	屋敷割	合筆	0	0	0	0	0	0	0
		分筆	0	0	0	0	0	1	0
	屋敷数	7	7	7	7	6	6	7	7
	屋敷替え	0	6	0	2	4	5	5	0
	変化なし		1	6	5	2	1	2	7
	空き地	1	0	1	0	0	0	0	0

*付紙が剥がれた屋敷地は空き地を含む

**付紙が剥がれた屋敷地からの変化は空き地に含めた

***正徳4年以降、御使番町の0t-7は町人地に含まれる

御使番町は慶長18年頃に屋敷割された7筆が、貞享2年まで変わらず存続している。ところが、貞享2年～正徳4年の間に西端の0t-7が町人地になったため、武家屋敷地は6筆に減っている。その6筆は、文化8年までに1筆分筆して7筆になり、慶応まで変わっていない。

3.2 屋敷替え

上江戸町と中江戸町の屋敷替えに共通する点は、江戸初期から中期にかけて屋敷地の半数を超える屋敷替えが行われていることである。特に慶長18年～万治2年の大火前の間の屋敷替えが上江戸町で19件、中江戸町で17件ある。これは元和9年(1623)に忠直が豊後へ配流された際、勝姫が江戸へ移り、仕えていた者もそれに従ったことに起因する¹⁴⁾。前述のように、上江戸町と中江戸町は慶長16年の勝姫輿入れによってできた町で、慶長期の図1-1にみられる萩原長兵衛や日名地又右衛門らの名前は、忠直時代の給帳¹⁵⁾に記されているが、それ以前の秀康時代の給帳¹⁶⁾や忠昌以降の給帳¹⁷⁾では確認できない。したがって、上江戸町と中江戸町は勝姫が江戸へ移ったために、大規模な屋敷替えがあったとみてよい。その後は万治2年の大火後～貞享2年の一時期、北西端の武家屋敷地が台所人の役宅や塩硝持所になるものや、安永4年～文化8年にかけて地方地や茶畠になった武家屋敷地もある。但し、これらはすべて慶応には武家屋敷地に戻っている。

これに対して、下江戸町の屋敷替えは江戸初期～幕末までの各時期に繰り返し行われている。特に貞享2年～正徳4年の間が15件あって最多である。これは貞享3年の大法に伴って万治2年以来、北側の屋敷地を占めていた加藤内膳や永見大吉など上級武家の与力屋敷に替わって8筆の武家屋敷になった結果である。

もう一方の御使番町も、江戸時代を通して屋敷替えが繰り返されている。但し、貞享の大法後に 0t-7 が町人地に替わった以外は、いずれも武家同士の屋敷替えである。したがって、前述した江戸町にみられたような武家屋敷地から与力屋敷や藩の塩硝持所や外塾所、町方が支配する地方地に替わった例は一切ない。

4. 江戸町と御使番町の特徴

以上のように、上江戸町と中江戸町は、慶長 16 年に勝姫とともに福井へ移住した家臣のために新たに屋敷割されている点が特徴であり、これまでみてきた武家町とは町の成立過程が大きく異なっている。そして、元和 9 年の勝姫の江戸移住によって居住者が入れ替わる点も、他の武家町の屋敷替えとは違っている。また、寛文 9 年の大火前～正徳 4 年の間の一時期、台所方の役宅が上江戸町で 4 筆、中江戸町で 8 筆配されることも他に類例はない。

御使番町は町の成立時期が古く、慶長 18 年の図 1-1 に既に 6 筆が屋敷割されている。慶長期の 6 筆はすべて御使番の役宅であり、町の名称もここから付けられたとみてよい。さらに下江戸町に配された 7 筆を含めると、下江戸町と御使番町は 16 筆中 13 筆が御使番の役宅が集中していることになる。このように、役職に関連した屋敷割が行われた例は、家格や禄高の違いによる屋敷割が中心であった大名町や中ノ馬場との違いが窺える。

5. おわりに

江戸町と御使番町における武家屋敷地の変遷を検討した結果、以下のことが指摘できる。

- 1) 慶長 16 年の勝姫輿入れとともに屋敷割された上江戸町と中江戸町は、元和 9 年の勝姫の江戸移住の際に大きい敷地であった勝姫の下男や小人衆の屋敷が細かく分筆されている。それ以降、上江戸町は万治 2 年の大火前までに屋敷割された状態のまま、幕末まで変わってない。一方、中江戸町の屋敷割は、江戸時代を通して合筆や分筆によって頻繁に変化している。
- 2) 上江戸町と中江戸町の屋敷替えは勝姫の移住直後が激しく、すべての居住者が入れ替わっている。その後は一時的であるが、武家屋敷から藩の台所方の役宅や塩硝持所のほか、地方地に替わった屋敷地も確認できる。
- 3) 下江戸町は慶長期に屋敷割された状態が貞享 2 年まで続いているが、貞享 3 年の大法以降、北側の屋敷地 (SE-9) が大きく変わっている。御使番町も下江戸町同様、慶長期に 7 筆に屋敷割されてからは、やはり貞享 3 年の大法後に西端隅の武家屋敷 (0t-7) が町人地になり、敷地数も減少している。
- 4) 下江戸町と御使番町の屋敷替えは、江戸初期～幕末までの各時期に繰り返し行われている。しかし、両区域とも武家屋敷が塩硝持所や外塾所、地方地などに替わることは一度もなく、常に武家屋敷地が占めている。
- 5) 慶長期の御使番町は 6 筆すべて御使番の役宅であった。しかし、御使番の役宅は時代とともに減少して貞享 2 年以降の御使番町は役職に無関係な藩士の居住区になっている。

[注]

- 1) 拙稿「福井城下の武家地の研究 8～18」日本建築学会大会梗概集、同北陸支部研究報告集、福井工業大学研究紀要で報告している。2007-2011
- 2) 8枚の城下絵図はすべて、松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管。
- 3) 福井県立図書館 郷土誌懇談会共編『続片聾記(上)』福井県立図書館, p532, 1955.3に「江戸町由来 一、高田様江戸より被爲入候節、當時之江戸町は其節松本通り町成りしを一側そとへ出し候、其跡家中に被成江戸より御供之面々被差置候故江戸町と申とかや」とある。
- 4) 御使番町については、下中邦彦編『日本歴史地名大系 第18巻 福井県の地名』平凡社, p250, 1981.9や福井市役所編『稿本福井市史(上)』歴史図書社, p416, 1976.1を参考になっている。
- 5) 藩政当初の江戸町は上・下(後の中江戸町)の2町に分かれていた可能性が高く、3区に区分けされたのは後年になってからと考えられる。
- 6) 松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管、『源秀康公御家中給帳』『福井市史 資料編4 近世二』福井市, pp. 184-202, 1999.3 所収。
- 7) 『福井市史 資料編別巻 絵図・地図』福井市, 1989.3や舟沢茂樹『福井城下ものがたり』福井PRセンター, 1977.4、松原信之『若越城下町古図集』古今書院, 1957.7などを参考になっている。
- 8) 注7と同じ
- 9) 貞享3年(1686)に福井藩は47万5000石から、25万石に減封されている。
- 10) 貞享3年の大法以後、御使番町の西端にある一部の武家屋敷地が取り払われ、町人地である亀屋町が成立している。
- 11) 地子地とは、元来地方町となるが、郭内にあったため地子町として町方支配になっていた屋敷地を指す。
- 12) 貞享3年の半知を受け、多くの武家屋敷地(与力屋敷や足輕屋敷も含む)の跡に漸次地方町が成立している。
- 13) 拙稿「元御泉水町、天王町と八軒町における武家屋敷地の変遷」福井工業大学研究紀要40号, pp. 438-447, 2010.6
- 14) 『続片聾記(上)』福井県立図書館・郷土誌懇談会共編, 福井県立図書館, p149, 1955に「元和九年三月二十九日仙千代君御迎笹治大膳被遣旨御直に被仰渡候、」とあり、忠直が豊後へ配流された際、勝姫の福井を離れて江戸に戻っている。
- 15) 松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管、『宰相忠直公御給帳』前掲14)と同じ『続片聾記(上)』, pp. 330-338, 1955 所収
- 16) 注6と同じ
- 17) 松平文庫 松平宗紀所蔵 福井県立図書館保管、『伊豫守忠昌公御代給帳』『越前守光通公御代給帳』『越前守綱昌公御代延宝七末年給帳』『吉邦公御代給帳』『兵部大輔宗矩公御代給帳』などを参考になっている。前掲14)と同じ『続片聾記(上)』, pp. 349-489, 1955 所収

(平成24年3月31日受理)